

河野病院長が上五島の地域医療を視察

■ 離島医療を支える医師のへり搬送 ■

午前8時。医師たちを乗せたヘリコプターが長崎を飛び立つ。

昨年11月から、ヘリコプターを活用した医師搬送事業（NIMAS）のトライアル運行が始まった。長崎大学病院はプライマリアケア研修の一環として週1回、研修医と指導医を上五島病院に派遣。医師たちは外来診療を担当している。上五島までの飛行時間はわずか25分。医師になって9年目の指導医、榎田智子医師は4月からへりに搭乗し、これまでに派遣は5回を数えた。

午前10時。「今日はどうされましたか?」「咳が止まらず、夜も苦しくて寝れなくて」。患者の女性は訴えた。榎田医師は丁寧に話を聞きながら、側で研修医の岡村卓真医師が診察の様子を見ている。岡村医師は今春医学部を卒業し、研修医になったばかり。大学病院での研修では現在、麻酔科を回っているが、患者との対面は初めてだった。診察に臨む顔には緊張がにじむ。この日は2人の患者さんを診た。岡村医師は「患者さんと接するのは初めて。機会があれば、また来たいと思う」と充実した顔で話した。

上五島病院の八坂寛宏病院長は「若い医師たちがこういったへき地医療の現状を見ることには意味がある」という。「将来、専門医になったときに、こうした島の医療を知っておくことが生きる」とメリットを話す。プライマリアケア研修は上五島のほかにも、県内の北松地区や島原地区など4カ所の外来診療に全研修医がかかわっている。



離島へ医師たちを運ぶヘリコプター



研修医の岡村医師（左）と指導医の榎田医師



診察を終え、カルテを確認する岡村医師



患者を診察する榎田医師

■ 全国から集まる研修医 ■

若い医師たちに島の医療に目を向けてもらうためには、魅力をどうアピールするかにかかると。給与を高くして募集しても、すぐに医師が集まるわけではないという。「給与よりも住環境を整えることが大事なようです」と八坂病院長は苦笑する。今春、新上五島町は着任した臨床研修医に対して、生活面のサポートを目的として支度助成金を支給する制度をつくった。

上五島病院には毎年、聖路加病院や広島大学病院など全国から研修医が訪れている。数週間や数カ月と研修の期間はさまざまだが、少しずつ研修医の間で口コミで広がっているという。上五島での経験は実際に島を訪れた研修医たちに「医療人の原点」を認識させている側面もある。「東京の病院では患者さんのことをよく分からないまま、向き合うことがなかった」。研修で訪れている医師が上五島に来た理由をこう話した。急性期医療を担当していたとき、次から次へと患者を診て、毎日が追われる日々だったという。ほかの研修医も「いろんな症状の幅広い患者さんがくるので、充実している」と話した。

上五島病院はMRTやCTなどの医療機器を備え、2次救急医療を担う病院としての機能はある。重症患者が発生した際、大学病院や医療センターなどの3次医療施設へのドクターヘリでの患者搬送やより専門的な視点からの診断などで、大きな病院との連携は欠かせない。「これから人口が確実に減っていく中、いかに医療の質を落とさずに取り組めるかが大切」と八坂院長は話した。



上五島病院の研修医たちと懇談会

■ 病院長が上五島病院を視察 感染症対策講演も ■

2012年5月30日、河野茂病院長は離島医療の現状と派遣された研修医の診療などを視察するため、上五島病院を訪問した。

上五島病院は島内唯一の入院機能を持つ基幹病院で、ベッド数は186床。平成16年の市町村合併前に5つの自治体それぞれが抱えていた病床を1カ所に集めた。現在、それぞれの病院では外来診療のほかに、人工透析は有川医療センター、入院は上五島病院と役割を分け、機能を明確にした。

河野病院長はこの日、新上五島町役場を表敬訪問した。江上悦生副町長は「日頃から医師の派遣や情報通信を使った画像診断など適切な医療を提供してくれていることに感謝している。今後とも島の医療が継続できるよう、支援と協力をお願いしたい」と謝意を表した。新上五島町によると、町内の高齢化率は29.7%。一方で高校を卒業した若者の95%が島外へ流出し、子どもの数も約10年間で3分の2に減少している。島の主要産業だった漁業などの第1次産業が衰退し、若者の雇用の場を見出せていない。島の人口も毎年500人のペースで激変しているようだ。

小さな島にとって感染症対策は重要である。上五島病院に勤務するある医師は「この病院で院内感染が広まったら、病院の機能は停止してしまう恐れがある。島にとって院内感染対策は重要な問題」という。河野病院長は上五島病院の医療スタッフ約40名に、感染症対策などについて講演した。1類感染症や結核に対応した病床を備える長崎大学病院国際医療センターを紹介しながら、院内感染対策について説明。「病院の規模の大小にかかわらず、国が示す標準予防策に基づいて取り組むべき」とした上で、「ノウハウや情報交換の面からも大きな病院と連携して、院内感染に取り組んでいく必要がある」と強調した。

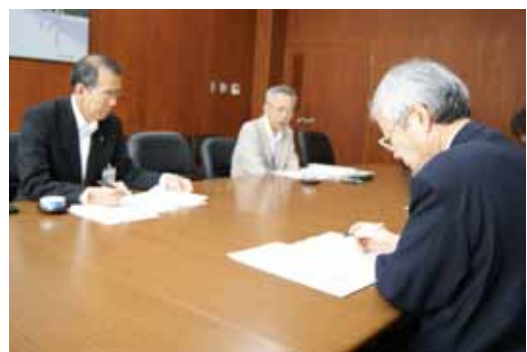
上五島病院の八坂院長（中央）
の案内で院内を視察する河野
病院長（左） ▶



指導医の診察風景を視察



院内感染対策について講演する河野病院長



江上副町長から町の概要について説明を受ける

■ 行政と一体の取り組み ■

島の医療の特徴は、行政と一体で迅速に取り組めることにある。特にワクチン接種や検診ではそうである。乳児健診では保健師が家を訪問して受診を促しているようだ。ワクチン接種の多くを公費で助成している。子宮頸がんの原因といわれるウイルスのワクチン接種も国に先駆け、県内でもいち早く導入した。通院する患者や入院の付き添いの家族への通院費も助成している。厳しい財政状況の中でも医療への支出を優先している。

一方で、医師不足を解消するために、医師たちが定着するかどうか大きな課題だ。そこには派遣される医師の家族、子どもたちの教育や配偶者の島暮らしへの理解が必要になってくる。上五島を訪れるためにはフェリーか高速船しかなく、長崎からは片道1時間以上かかる。交通アクセスの悪さが医療人たちの足を遠のさせる一因にもなっているようだ。そうした中、ヘリを活用した医師の派遣やドクターヘリでの患者の搬送は大きな意味を持つ。行政やさまざまな病院が一体となって島の医療を支えている。 (病院企画課広報)



上五島の有名な海水浴場蛤浜



上五島には29の教会がある。国指定重要文化財の頭ヶ島教会



上五島の街の風景



亀山社中の船が上五島沖で遭難。坂本龍馬ゆかりの地である